

Profile

59歳。自由民主党所属の参議員議員。2018年10月内閣府特命担当大臣に就任。地方創生担当、まち・ひと・しごと創生担当、規制改革担当、男女共同参画担当、女性活躍担当。



Satsuki Katayama

片山さつきさん

「都市部だけでなく、地方でも、女性たちは大いに輝き始めています」

女性がたくさんいます。日本が、次の次元にジャンプアップするためには、女性にとって融通のきく社会をつくっていくことが必須」（片山さん）

「同じ時間と同じ場所に出動して、朝から晩まで顔を合わせて仕事をする。男性はそれにこだわりますが、女性はそういう。一律にはなびきません。自由な発想で、周りの人と力を合わせ、不便なものを便利にしていこうというアプローチができる。私は30年前からテレワークを研究していますが、今は便利なデバイスが次々と登場し、新しい働き方を可能にしてくれる時代。それも、女性には追い風になります」（松水さん）

リーダーになったからこそ見えた新しい景色の美しさ

リーダーとして現在も活躍中の4人の賢者。「リーダーになったからこそ見えた景色」をうかがいました。「若いときは、「管理されるのが嫌いな自分が、管理職なんてできるわけがない」と思っていました。でも、ひとつキャリアが上がることに、見えてくるものが違った。仕事を続けていくうえで、キャリアアップ、キャリアチェンジが必要になるところがあるんです。そういうときに、勇気をもってチャレンジしてみると、視界が開けた。42歳で畑違いのドコモに転職し、45歳で独立と、そのつとどなんとか生き抜いてきて、気がついたら、足腰にしつかり筋肉がついていました

（笑）。「私はここでいい」では、足腰が弱ってしまふ。社会が変わる今、女性たちも心と体を整えて、しなやかに輝いていってほしい」（松水さん）

「新しいところに行っても同じことをやるのではつまらない。今は働き方も仕事のツールも変わっているし、なにより組織は生き物なんです。だから、つねに刺激を求めて仕事に向き合っていく。私の座右の銘は「火中の栗は美味しい」なのですが（笑）、周りの熱いところを取り除けば、ホクホクの美味しい栗が待っているということ、リーダーになって知りませんでした。熱いのが嫌いな人もいるでしょうから、あえて拾えとは言えませんが（笑）」（小林さん）

「私は2013年に、アジア太平洋洋圏の女性へのエンパワーメントが評価され、ホワイトハウスでオバマ大統領から「チャンピオン・オブ・チェンジ」賞をいただきました。そのときの感動を日本でも、と思ったことが、アワード創設のきっかけです。皆さんの地道な取り組みを少しでも世の中に伝えることができた、そのことに喜びを感じています」（フィッシュさん）

「たとえば、女性活躍のための制度がつけられたのに、



地域に保育圏はできない。そういう、国の政策を現実に取り戻させる仕事は、政治にしかできないこと。東日本大震災の際、事業者再生支援の法律をつくりました。が、地元の方に「あれがあったから廃業せずにすんだ、ありがとう」と言われ、とてもうれしかった。それは、国会議員だからできた仕事です。安倍総理と雑談したときにおっしゃっていたのですが、「ある域に達すると、女性のほうがブレないし折れないし、信用できる」と（笑）。もっともっと、日本を女性が輝ける社会へ近づけていきたいと思っています」（片山さん）

今なお、働く女性たちの前には、乗り越えるべき困難や解決すべき課題が山積みになっています。けれど、自分らしくしなやかに、仕事に邁進している人たちの、なんと多いことか。新たな世界へ向けて前進を続ける。それが、美しき女性リーダーたちの姿なのです。